広島工業大学紀要研究編
第56巻（2022）7-13
論　　文

修正されるテクスト

『トテル詩選集』出版の文脈におけるトマス・ワイアット作品の再考

楠木　佳子 *

（令和３年11月４日受付）

Alterations in the Text

Reading Thomas Wyatt in the Context of Publishing *Tottel's Miscellany*

Yoshiko KUSUNOKI

（Received Nov. 4, 2021）

Abstract

Richard Tottel published *Songs and Sonnets*, commonly known as *Tottel's Miscellany*, in 1557, in the reign of Mary I. It includes works of some renowned courtly poets in the court of Henry VIII and works written by contemporary poets. Before being printed, courtly poems were usually circulated among closed circles with a limited readership in the form of a manuscript. Editing the first printed anthology of English poetry, presumably targeting a wider audience, Tottel modified the original texts in various ways: one major change was adding titles. This paper mainly looks at the compiled works of Thomas Wyatt, one of the prominent figures in the anthology, and examines the attached titles and other significant alterations. In doing so, it will become clear that those changes were given in accordance with the particular needs of a popular audience and the Marian political context.

Key Words: Thomas Wyatt, Tottel's Miscellany, anthology, print, Henry VIII, Mary I

はじめに

1557年６月，*Tottel's Miscellany*（『トテル詩選集』）の初版がロンドンの印刷出版業者 Richard Tottel によって出版された。時はメアリー１世の治世である。この詩選集におさめられたのは，ヘンリー８世期に宮廷詩人として活躍した Henry Howard, Earl of Surrey, Thomas Wyatt, 学者詩人である Nicholas Grimald の作品をはじめ，チューダー朝中期から後期にかけて創作活動を行った複数の詩人の作品である。初版出版当時その半分がすでに故人であり，残り約半数は創作活動を続けていた詩人であった。出版当時のタイトルは，*Songes and Sonettes written by the right honorable Lorde Henry Haward late Earle of Surrey, and other* であり，後によく知られる *Tottel's Miscellany* のタイトルで呼ばれるようになったのは19世紀（1870年）の Edward Arber の版からである。エリザベス朝以降も長く読み継がれた *Tottel's Miscellany* の人気の理由は，１つにはそれが母国語である英語を継承すべき権威ある言語として使用した初めての詩集であったことであり，また１つには詩作品集でありながら，ヘンリー８世期の宮廷文化を後の時世に詳しく伝える貴重な歴史的資料であったためだと言える。[1]

Tottel's Miscellany については，今なお発表される論考は多い。例えば，2013年から2014年には相次いで３つの

* 広島工業大学環境学部建築デザイン学科

論考が出版された。2013年出版のJ. Christopher Warnerの *The Making and Marketing of 'Tottel's Miscellany'* では，1556年，57年当時の出版の背景に関する詳細な調査に基づく考察がなされている。2014年出版，Matthew Zarnoieckiの *Fair Copies: Reproducing the English Lyric from Tottel to Shakespeare* は，*Tottel's Miscellany* を発端とするルネサンス詩人の作品の印刷物など"reproduction"について，それらの持つ影響を論じたものである。同じく2014年のStephen Hamrick編集による論集 *Tottel's 'Songes and Sonettes' in Context* には8編の論考がおさめられ，それぞれが出版の背景を中心に，イデオロギー的，経済的，社会的，歴史的側面からのアプローチを試みている。これらの論考に見られるように，一つに収斂されることのない多面的かつ流動的なとらえ方はさらなる解釈の可能性を感じさせる。従来の研究においては，特に詩選集以外でもその作品が注目されてきたSurreyやWyattの個別のテクストをとりあげることが多く，英国で初めて用いられたソネットの形式や，宮廷風恋愛のモチーフ，宮廷作法の教訓的モデル，立場・環境に対する欲求への道徳的姿勢や自己啓発の追及など，個々の作品が読者に提供するテーマに注目してきた。これに対し，編集者，出版人によって与えられたアンソロジーとしての文脈に焦点があてられることは比較的少なく，一連の作品群を構造的に分析する必要性も述べられてきた。

本稿では，出版当時の時代的コンテクストに即して *Tottel's Miscellany* を読む近年のいくつかの研究を足掛かりに，Thomas Wyattの作品を再読し，Wyattの作品がアンソロジーの一部として当時どう機能していたか，その一端を考察する。その方法の１つとして，詩選集の編者により作品に付されたある種特徴的なタイトルに注目する。チューダー朝後期の出版文化の中でこのタイトルが付されたことの意味とそれが読者に与えた影響をあらためて考察する。またある一編の詩に施された修正が時代の要請を反映するものであったことを新たな読みと共に指摘する。

初版当時の時代背景と出版の状況

Richard Tottelは16世紀半ばのロンドンで最も成功した出版人であり書籍商の１人であった。主に法律関係の教科書や文書の印刷出版に携わり，それらの出版に関する特許権をエドワード６世，メアリー１世，エリザベス１世の３代の国王から与えられている。そのキャリアの中で最も偉大な業績となったのが *Songes and Sonettes* の出版である。初版の翌月に再版が出されると，16世紀末までに少なくとも11版が出版された。[2]

Tottel's Miscellany の初版出版から第２版出版までの期間が約７週間と非常に短いことについてはこれまで様々に論じられてきた。内容に大きな改編がみられることから，何らかの政治的圧力を理由とする改編と再出版という見方もある。改編の内容で顕著なのは，SurreyとWyattに続く第３の詩人として並置されていたGrimaldの作品が30篇削除されてNicholas Grimaldの名前そのものもイニシャル（N.G.）に変更された点である。Grimaldは当時生存しており，一説にはGrimald自身がTottelのもとで編集に携わったとするものがある。時代の状況を鑑みると，メアリー１世の新教徒弾圧が過酷さを極めていた当時，Grimald自身によるなんらかの保身的対処がこの第２版の改訂に表れたとも言われている。*Tottel's Miscellany* はTottel自身が編者である可能性も含めて複数の説があり，未だにその編者は不明である。[3]

政治的懸念に加え，商業的理由で初版後まもなく再版したという可能性も指摘されている。初版がよく売れた，ということである。1500年代中期，アンソロジーの出版物がまだほとんどみられない中，本来マニュスクリプトに収められ限定的な読者層である上流階級のサークルで読まれてきた詩作品が，編集者によって収集され編纂されて出版されることは，著者，出版人，読者，どの立場にあっても劇的な変化であり，まだ実験的な試みだったと言えよう。詩のアンソロジーがどのような読者層に，どこまで普及するのか。想定外の売れ行きが，よりreader-friendlyな改訂を施した第２版出版につながったとも考えられる。

この読者が親しみやすい変更点を構成の面で見るならば，作品の一行目の一覧（table）が加えられ，ページが表記されたこと，また初版では一部散在していたSurreyとWyattの作品がそれぞれ個別のセクション内にまとめられた点である。Hamrick 編集の論集の中でPaul A. Marquisは，改訂，再編される版は「その時代の圧力や，市場を開拓したいという出版者の強い願いを反映するもの」としながら，次のように述べる。

> "Revised and expanded anthologies such as Tottel's disclose not only the fragile and dangerous climate of the times, but the ethos of authors, editors, and readers willing to accommodate and support the production of such culturally significant work." (20)

1557年のごく短期間での再版は，不安定な時代情勢に強いられた早急な政治的対処というだけでなく，読者も含めた詩選集の出版に関わるあらゆる立場の人々がこの「文化的に重要な作品」が今後広く受容され存続することを切望した末の大きな動きだったのである。その結果，*Tottel's Miscellany* はこの第２版がエリザベス朝以降最も浸透していくことになる。

作品につけられたタイトル

Tottel's Miscellany に収録された Wyatt の作品には，編集段階で付されたオリジナルにはないタイトルがある。"The lover hopeth of better chance"（「恋する男が運が向いてくるのを待つ」）（77），"The lover complaineth the unkindnes of his love"（「恋する男が女のつれなさを嘆く」）（91）など，Wyatt のセクションの前半に配置された恋愛詩（76編）のうち約７割のタイトルには "the lover" が登場する。[4] Wyatt 作品に特徴的な短い要約文調のタイトルは，それが恋愛詩であることを読者に明示し，読者はそれにより一見わかりやすい「恋愛詩」を読むよう誘導されていく。

ここで一つの例を見てみよう。「恋する男が自分の安らぎのない状況を述べる」とタイトルが付された全28行からなるダブルソネット形式の詩がある。

The lover describeth his
restlesse state.

The flaming sighes that boyle within my brest
Sometime breake forth and thei can well declare
The hartes unrest and how that it doth fare,
The pain therof the grief and all the rest.
The watred eyen from whence the teares do fall,
Do fele some force or els they would be dry:
The wasted flesh of colour ded can try,
And sometime tell what swetenes is in gall.
And he that lust to see and to disarne,
How care can force within a weried minde:
Come he to me I am that place assinde,
But for all this no force it doth no harme.
The wound alas happe in some other place:
From whence no toole away the skar can race.
（105，1 -14）

「胸のうちにたぎる火を吐く溜め息が時折迸り出て」と始まるこの105番の詩は，恋愛による痛みや悲しみをうたう恋愛詩ということになっているようだが，実は Wyatt の詩のテーマの曖昧性を表す例としてしばしばとりあげられる。Amanda Holton & Tom MacFaul は，"Despite the title it carries in the Miscellany, there is no particular reason to think this a love-poem"（425）と述べ，本作品を恋愛詩として読む理由がないことを指摘する。1541年，Wyatt は政敵 Edmund Bonner による告発で反逆罪に問われ，投獄されているが，R.A. Rebholz はこの105番はその際に書かれた詩だとして "Wyatt probably wrote the poem in prison in 1541 and is alluding to his condition as a prisoner"（362）と解説する。

この詩を Wyatt 自らの政治的苦境を訴えたものとみる材料として，詩の中のいくつかのイメージに改めて注目してみたい。まずは１行目の "sighes"，そして前半最後にある "wound"（傷）と "skar"（傷痕）である。溜め息が心の痛みを表明するものとして描かれ，自分がおかれた苦境を嘆きながら，13，14行目では「ああ傷が別のところにあればよいのに，如何にしても痕を消せない傷が」と，何かしらの恨みを持つ敵の存在がほのめかされる。

「溜め息」のイメージは，詩選集の中で105番の詩の２つ後に配置された107番の詩の冒頭にも見られる。

The lover sendeth sighes to
mone his sute.

Go burning sighes unto the frosen hart,
Go breake the yse with pities painfull dart.
Might never perce and if that mortall praier,
In heaven be heard, at lest yet I desire
That death or mercy end my wofull smart.
（107，1 - 5 ）

「燃える溜め息よ，凍りついた心のもとに行け」で始まるこの詩に付されたタイトルは「容れられぬ愛を嘆き，男が溜め息を送る」である。この作品にはオリジナルとされるペトラルカの詩があるが，愛を拒否する女性を示す直接的な表現はオリジナルの方が多い。[8] ペトラルカの作品を比較的自由に模倣したとされる Wyatt の詩においても愛する人を非難する表現はいくつか見られるが（"For truth and faith in her is laid apart"「誠実と貞節は彼女には欠けているからだ」（11）），溜め息が融かす "the frosen hart" や語り手がそれをもって自分の苦しみを終わらせることを願う "death" と並置された "mercy" は氷の心をもつ女性の慈悲なのか，生死をも左右する状況でのより現実的な慈悲なのか，多義的で曖昧さは残る。

「溜め息」の比喩は Wyatt の複数の作品に度々登場するが，Rebholz はまた，溜め息と同時に「消えない傷痕」のイメージが現れる詩として Wyatt が獄中で書いたとされる次の詩を挙げている（362）。

Wiate being in prison, to
Brian.

Syghes are my foode: my drink are my teares.
Clinking of fetters would such musick crave.
Stink, and close ayre away my life it weares.
Poore innocence is all the hope I have.

Rain, winde, or wether judge I by mine eares.
Malice assaultes, that righteousnesse should have.
Sure am I, Brian, this wound shall heale again :
But yet alas, the skarre shall still remain.
（126，1－8）

「溜め息が我が食べ物，涙が飲み物だ」で始まるこの作品はマニュスクリプトにおいても “Tho. Wiat to Bryan” と既にタイトルがある。“Clinking of fetters”, “Stink, and close ayre”, “Rain, winde, or wether judge I by mine eares” など獄中を思わせる表現から，これも Wyatt が1541年の投獄中に書いたものとされ，*Tottel's Miscellany* では恋愛詩ではなく宮廷人の処世術，人生訓を扱うセクションに配置されている。タイトルも「入牢中のワイアットがブライアンに宛てて」と，創作時の状況に即したタイトルが付された。冒頭の “syghes” は溜め息の響きと重なり，語り手が陥る苦境をまず印象付ける。そして最終行の「消えない傷痕」が後に残すのは，再び “s” 音の繰り返しによる深い苦悩の余韻である。“Brian” は同じくヘンリー８世期の宮廷人 Sir Francis Bryan をさす。最後に Bryan に「自分が負った傷は癒えるだろうが，傷痕は残るだろう」と語りかける語り手は，誰かほかのところに「如何にしても痕を消せない傷」があればよいのに，と願った先の105番の詩の語り手，“the lover” と重なる。

さらに105番，107番の「恋愛詩」の読み方は，２つの作品の間に配置された次の106番の詩を読むことによってある方向へと導かれるようである。

The lover lamentes the
death of his love.
The piller perisht is wherto I lent,
The strongest stay of mine unquiet minde:
The like of it no man again can finde:
From East to West still seking though he went.
（106，1－4）

「私が寄りかかっていた柱が崩れ落ちた」という一行目は，1540年に Thomas Cromwell が処刑され，Wyatt が有力なパトロンを失ったことを指すことが指摘されてきた。[6] ペトラルカが自らのパトロンを失った際に書いた詩がオリジナルであるが，崩れた柱が “mine unquiet minde” の最も強力な支えだったとする２行目は，Wyatt が数々の作品に登場させた，ヘンリー８世の宮廷人として追求する “quiet of mind” を思い起こさせる。女性の存在を思わせる明らかな表現は最後まで見られず，「死が赦すまでこうして日々嘆く」，「恐ろしい死が我が嘆きを取り除くまで」と続き，“death” が唯一苦悩を終わらせるものとして再び描かれる。詩選集の恋愛詩セクションにあるこの詩に付されたタイトルは「男が愛するひとの死を悼む」だが，創作の背景にはこのように Wyatt 自身が置かれた政治的困難がある。

上に見てきた一連の「恋愛詩」は，「溜め息」や「消えない傷痕」といったある種ありふれたイメージの重複により，1540年前後の Wyatt 暗黒の時期にかかれた政治的作品としての読み方が確認できるとともに，政治的背景を持つとされる106番の詩が，その前後の詩が有する重層的な読み方の可能性を一層強くする。「恋愛詩」のテーマの裏に見え隠れする政治的テーマは，この３つの詩が連続して配置されていることで色濃く現れるように思えるが，同時に，それらは詩選集の中であくまでも「恋愛詩」というより大きな枠に収められた３篇であり，多くの一般読者は “the lover” をガイドとして読み進めるのである。

ヘンリー８世の宮廷で詩作を行った Wyatt の多くの作品が扱う内容は，これらの例に見られるように１つのテーマに収まらない。手書きのマニュスクリプトでは，それを手にした宮廷サークルの読者が身近な作者の意図を酌みつつ読んだ内容も，後代に印刷されたアンソロジーの中では単一的なテーマでくくられ，「読みやすさ」が最重視されて読者に提供された。Tom Betteridge は *Tottel's Miscellany* の編集における変更・修正などの目的が “public poetic texts” としてのステータスを強調することにあったと述べ，恋愛詩のテーマや人文主義的テーマ，人生訓など「一般的な主題」に沿うことが，作者個人に対する注目以上に重要であったとする（139）。実際に，それは初めての英詩のアンソロジーとして幅広い読者層に受容されるための必要な操作であり，手法だったと言えよう。

消された名前の理由

ヘンリー８世の圧政下における Wyatt の詩作については，拙著に幾度か論じたところであるが，その作品は宮廷人グループなど限定的な範囲で読まれたマニュスクリプトの作品として主に扱ってきた。[7] そのような閉鎖的な環境においては，創作活動にともなう緊張は一宮廷詩人を詩作にかりたてる負の力を背景に作者と作品が同時期に存在してこそ生まれたものであった。

Tottel's Miscellany の初版が出版されたのは Wyatt の没後15年のことである。その間，ヘンリー８世の死去に伴う幼少のエドワード６世の即位と摂政政治，エドワード６世の死後メアリー１世の治世へと，わずか10年程の間に３代の国王が入れ替わり，チューダー朝イングランドは大きな変革期の只中にあった。ヘンリー８世から続くイギリス国教会に対するメアリー１世による反動は，プロテスタント

に対する迫害として多くの犠牲者，殉教者を出し，書物の出版に対する検閲制度も厳しさを増していた。激変する時代情勢の中，アンソロジーの一部として編纂された「故人」Wyatt の作品は，Wyatt 存命の時代に宮廷サークルで読まれていた時とは異なる意味が付され，一般の読者に提供されていく。

タイトルが付された以外にも手を加えられた箇所は多い。次に挙げる例はマニュスクリプトに収められた Wyatt のオリジナルの詩と，その詩が一部修正されて *Tottel's Miscellany* に収録されたものである（それぞれの番号は筆者による）。

(1)

Accused though I be without desert,
None can it prove, yet ye believe it true.
Nor never yet, since that ye had my heart,
Entended I to be false or untrue.
Sooner I would of death sustain the smart
Than break one thing of that I promised you.
Accept therefore my service in good part.
None is alive that ill tongues can eschew.
Hold them as false and let not us depart
Our friendship old in hope of any new.
Put not thy trust in such as use to feign
Except thou mind to put thy friends to pain.
（LXVI　1-12）[8]

(2)

The lover suspected of change
praieth that it be not beleved
against him.
Accused though I be, without desert:
Sith none can prove, beleve it not for true.
For never yet, since that you had my hert,
Intended I to false, or be untrue.
Sooner I would of death sustayn the smart,
Than breake one word of that I promised you.
Accept therfore my service in good part.
None is alyve, that can yll tonges eschew.
Hold them as false: and let not us depart
Our frendship old, in hope of any new.
Put not thy trust in such as use to fayn,
Except thou minde to put thy frend to payn.
（79，1-12）

Blage Manuscript におさめられたオリジナルの詩（1）では，各行の頭文字がアクロスティックになっている。"Anne Stanhope" という女性の名前である。一方で，*Tottel's Miscellany*（2）ではこのアクロスティックが一部崩れている。Holton & Macfaul はこの詩の注釈で「女性の名前をアクロスティックにすることは英詩では一般的であった」と述べながら，編集の段階で「気づかなかった」と指摘する。

> "The editor of the Miscellany seems not to have noticed this（acrostic）; he makes changes in lines 2-4 which destroy the acrostic. The acrostic on a lady's name was common in English verse. Anne Stanhope was married to Sir Michael Stanhope, a favourite of Henry VIII."（412）

しかしながら，編者自身が Grimald のように詩に精通した詩人であったという可能性から，このアクロスティックを見落とすことは不自然に思われる。この点に関しては Rebholz 他これまでの主要な注釈本においても，Tottel の編集段階でアクロスティックが壊されているということ，Anne Stanhope がヘンリー8世の宮廷人 Michael Stanhope の妻であること，それ以上の説明はなされていない（Rebholz，381，上利，127）。

ここで1つの可能性として，Anne Stanhope が指摘されている女性とは別の女性であることを考えてみたい。Anne Seymour, Duchess of Somerset である。Duchess of Somerset はエドワード6世の摂政として大きな権力を持った Edward Seymour, Duke of Somerset の妻で，彼女の maiden name は Anne Stanhope である。摂政である夫同様に，Duchess of Somerset はヘンリー8世の未亡人 Catherin Parr と並んで一時最も影響力のある女性だったといわれている。Katherin of Aragon の侍女として宮廷に入った Anne Stanhope は，後にヘンリー8世と結婚しエドワード6世をもうける Jane Seymour の兄 Edward Seymour と結婚し，Anne Seymour となる。夫の出世とともに自身も Duchess となり，ある意味王妃以上の影響力をも持つにいたった彼女は，プロテスタントの有力な支援者としても知られた。後にエリザベス1世時代の宗教改革においても重要な役割を担ったといわれている。[9]

ローマカトリック教会への復帰を目指すメアリー1世期の大きな動きの中で，熱心なプロテスタントで知られたエドワード6世に最も近い立場で自らもプロテスタントのパトロンとして活動した Anne Stanhope の名は，1557年の出版に際してあえてこの詩選集から消された可能性がないだろうか。Anne Stanhope が Duchess of Somerset ではなかったとしても，当時の時代情勢を考える時，"Anne

Stanhope”という政治的影響力のある名前がそこに印刷されていることに不都合があったことは間違いないだろう。

また，“Anne”のファーストネームだけが崩されていることにも意味を見出すならば，もう一つの可能性も出てくる。Anne Boleynのイメージを消すための修正である。というのも，実際にAnne Boleynを想起させるという理由でWyattの最も代表的なソネットの一つが詩選集に収録されていないのである。そのソネット，狩をテーマにした“Whoso list to hunt”では，狩人たちが追いかける雌鹿がCaesarの所有を示す「我に触れるな」と刻まれた首輪をつけている。この雌鹿がヘンリー８世の妃であるAnne Boleynを思い起こさせ，それが娘であるエリザベスに悪影響を及ぼす可能性を考慮して，詩選集から除外されたと指摘されているのだ。[10]

Holton & MacFaulは，当時の編集者がいかに慎重にその作業を行わなければならなかったかを次のように述べる。

> “Whoever compiled the Miscellany...knew that he had to be cautious in many respects. He could not present poems that attacked the present regime, but it is equally significant that he did not present poems that praised it.”（xv）

メアリー１世の政治体制に対してニュートラルな立場で編集がなされたことを指摘し，一例として詩選集の作者不明の１篇からメアリーを称賛する一部が消去されていることを指摘している。編集・出版する立場の人物がおかれたこのような状況を考え合わせると，慎重を期して行われたはずの編集作業において，“Anne Stanhope”のアクロスティックもまた，時代の要求により明確な意図をもって崩され，修正されたものだと言えるのではないだろうか。

おわりに

Surreyの作品に始まり，Wyatt，作者不明，Grimaldと順に配置される*Tottel's Miscellany*には，1557年当時，故人から現存の詩人へとある程度時系列的に読み進められる構成が備わっていた。各々のセクションの中にはさらに，恋愛詩から教訓詩への流れがあった。Tottelがこの詩選集の最初につけた読者に宛てる言葉，“To the reder”を読むとき，アンソロジーを読む人のために考えられたこの構成の意図が明らかとなるようである。

> ...If parhappes some mislike the statelinesse of stile removed from the rude skil of common eares: I aske help of the learned to defende their learned frendes, the authors of this woork: And I exhort the unlearned, by reding to learne to bee more skilfull, and to purge that swinelike grossenesse, that maketh the swete majerome not to smell to their delight.（14-19）

このように後半部分では“the learned”（学識ある人）に助言を求め，“their learned frendes”（学識ある友人）に詩選集の作者の弁護を頼み，“the unlearned”（学識不足の人）にはこれを読んで学ぶことを進める，と“learn”が繰り返されるように，この詩選集は読者の「学び」を目的としたものであることが強調される。普段は粗野な言葉を使う人（つまり大衆）に，この詩選集の助けを借りてより文体の技術を学び，洗練された言語を理解できるよう学んでほしいとTottelは述べる。初めて英詩のアンソロジーを読む多くの読者は，Tottelの言う「日常耳にする粗野な言語使用とはかけはなれた文体の荘重さ」を学び，理解しようとする段階にあったのである。

*Tottel's Miscellany*の出版で，読者はそれまで知りえなかった世界に足を踏み入れた。詩選集の前半では，宮廷詩が提示する新しい英詩の技巧と洗練された宮廷恋愛のモチーフを知り，知的欲求はさらに高まっただろう。学びはじめの読者にとって，詩選集を先へ読み進めるためにテーマのわかりやすさは不可欠であった。恋愛と政治の両義性を持つWyattのテクストを恋愛詩の枠組みにはめて読者に提供したことは，まずは作品を１つでも先へ読み進め，理解するという読者の目的のための編集上のしかけとして機能していると言える。編集段階でなされた修正を見ていくと，出版物が広く受容されることで生じる社会的な影響への懸念も当然感じられ，なされるべくしてなされた修正は多い。だが，出版当時の時代的コンテクストを背景として，既に作者不在のWyattのテクストは編集者による「修正」という新しい形を与えられ，それを受け取る新しい読者層とともに，新たな文脈を形成しているのである。

＊本稿は日本英文学会中国四国支部第69回大会（2016年10月　於愛媛大学）で行った研究発表「*Tottel's Miscellany*におけるThomas Wyatt作品を読み直す」に基づくものである。

注

1. *Tottel's Miscellany* の印刷出版について詳細を論じたものとしては，Matthew Zarnowiecki, *Fair Copies: Reproducing the English Lyric from Tottel to Shakespeare*（Toronto, 2014），22–46を参照。
2. Paul A. Marquis, "Printing History and Editorial Design in the Elizabethan Version of Tottel's *Songes and Sonettes," Tottel's 'Songes and Sonettes' in Context,* ed. Stephen Hamrick（Ashgate, 2013）, 13–15.
3. Tottel と Grimald の関係や Grimald の作品が多く削除された理由については，Amanda Holton and Tom MacFaul, eds., *Tottel's Miscellany: Songs and Sonnets of Henry Howard, Earl of Surrey, Sir Thomas Wyatt and Others*（Penguin, 2011）, xx-xxii を参照。
4. *Tottel's Miscellany* の引用は全て，Paul A Marquis ed., *Richard Tottel's 'Songes and Sonettes': The Elizabethan Version*（ACMRS, 2007）に依る。特に注記がなければ引用末に作品番号および行数を記載する。日本語訳は，上利政彦訳注『トテル詩選集―歌とソネット1557』（九州大学出版会，2010）を参照した。
5. Robert M. Durling trans and ed., *Petrarch's Lyric Poems: The 'Rime sparse' and Other Lyrics*（Harvard University Press, 1976）, *Rime* 153。
6. R. A. Rebholz ed., *Sir Thomas Wyatt: The Complete Poems*（Penguin, 1978）, 357, Kenneth Muir and Patricia Thomson, eds. *Collected Poems of Sir Thomas Wyatt*（Liverpool, 1969），430が詳しい。
7. 拙　著，"Anti-Courtly Poet?: Wyatt's Ambivalence Towards Power in His Satires" 広島大学英文学会『英語英文學研究』第49号，1–17，2005他。
8. Rebholz, *Sir Thomas Wyatt: The Complete Poems,* 100.
9. Anne Seymour, Duchess of Somerset については以下を参照した。Susan Abernethy, "Anne Seymour, Duchess of Somerset", The Freelance History Writer < https://thefreelancehistorywriter.com/ >, Janel Mueller, "Katherine Parr and Her Circle", *The Oxford Handbook of Tudor Literature,* eds. Mike Pincombe and Cathy Shrank（Oxford UP, 2009）
10. Holton & MacFaul, *Tottel's Miscellany*, xv. "Whoso list to hunt" のソネットについては，Rebholz, *Sir Thomas Wyatt: The Complete Poems*，77参照。

文献

Abernethy, Susan. "Anne Seymour, Duchess of Somerset" 8 April. 2016. The Freelance History Writer. 26 Oct. 2021 < https://thefreelancehistorywriter.com/ >

Betteridge, Tom. *Literature and Politics in the English Reformation.* Manchester UP, 2004.

Durling, Robert M., trans and ed. *Petrarch's Lyric Poems: The 'Rime Sparse' and Other Lyrics.* Harvard University Press, 1976.

Hamrick, Stephen, ed. Tottel's *'Songes and Sonettes' in Context.* Ashgate, 2013.

Holton, Amanda, and Tom MacFaul, eds. *Tottel's Miscellany: Songs and Sonnets of Henry Howard, Earl of Surrey, Sir Thomas Wyatt and Others.* Penguin, 2011.

Marquis, Paul A. "Printing History and Editorial Design in the Elizabethan Version of Tottel's Songes and Sonettes". *Tottel's 'Songes and Sonettes' in Context.* Ed. Stephen Hamrick. Ashgate, 2013. 13–36.

————, ed. *Richard Tottel's 'Songes and Sonettes': The Elizabethan Version.* ACMRS, 2007.

Mueller, Janel. "Katherine Parr and Her Circle". *The Oxford Handbook of Tudor Literature.* Eds. Mike Pincombe and Cathy Shrank. Oxford UP, 2009. 222–37.

Muir, Kenneth, and Patricia Thomson, eds. *Collected Poems of Sir Thomas Wyatt.* Liverpool UP, 1969.

Rebholz, R. A., ed. *Sir Thomas Wyatt: The Complete Poems.* Penguin, 1978.

Warner, Christopher J. *The Making and Marketing of Tottel's Miscellany, 1557: Songs and Sonnets in the Summer of the Martyrs' Fires.* Ashgate, 2013.

Zarnowiecki, Matthew. *Fair Copies: Reproducing the English Lyric from Tottel to Shakespeare.* Toronto UP, 2014.

上利政彦訳注.『トテル詩選集―歌とソネット1557』. 九州大学出版会，2010.

楠 木 佳 子 "Anti-Courtly Poet?: Wyatt's Ambivalence Towards Power in His Satires" 広島大学英文学会『英語英文學研究』第49号，1–17（2005）